

ADHD 治療薬服用者のアイデンティティ

【研究目的】

本研究の目的は、注意欠如・多動症(以下、ADHD)と診断されその治療薬を服用する人々が、服薬に伴い経験する自身の行動や感覚の変化をどのように受け止めているかについて、明らかにすることである。ADHD 治療薬は、ADHD の症状をやわらげる一方で、認知や行動といった個人の内面に関わる部分へ作用することから、服用者の心理的混乱を引き起こす要因となる可能性が指摘されている。本研究ではそうした服薬をめぐる葛藤を、アイデンティティの問題として捉え、ADHD 治療薬服用者の体験について考察する。

【研究対象者・研究手法】

ADHD の診断を受け治療薬を服用している者のうち、20 歳以上で服用期間が 1 年を越えている者を対象とし、研究協力者 2 名に 60 分～90 分の半構造化インタビューを実施した。インタビュー内容は録音した上で逐語録を作成し、ナラティブ分析を行なった。

【研究結果・考察】

研究対象者が、ADHD 治療薬の服薬を通して葛藤を抱いていたことが明らかとなった。ADHD 治療薬の服用者は、治療薬によってもたらされた集中力や学業成績の向上といった効果と同時に、食欲低下や主観的「楽しさ」の減少などの副作用を感じていた。望ましい結果と望ましくない結果をどちらも経験することで、薬物療法を有用な手段であると捉えながら、不安や飲みたくない気持ちも同時に抱えるという心理様相が ADHD 治療薬の服用者の中に生じていた。

対象者の一人は、服薬により、生来自身の中にあった発想力や行動力が失われ、「自分がつまらない存在に」変化したと感じていた。ADHD 治療薬が服用者の内面的な性質を変化させることで、否定的な感情やアイデンティティの揺らぎを引き起こすことが明らかとなった。

ADHD 当事者のアイデンティティの揺らぎは、自身が ADHD である可能性に直面する瞬間にも生じていた。対象者はそうした瞬間に、自責の念が払しょくされたり、自分は「障害者」であるのかもしれないという動揺が生じたりした。

在日朝鮮人4世のアイデンティティ

：民族名使用に焦点を当てて

【研究目的】

本研究の目的は、在日朝鮮人4世の民族名使用に着目し、彼らが在日朝鮮人としての自分をどのように捉えているかを検討することである。具体的には、どのような経験を経て、どのような思いで民族名を使用して日本で生活しているかを検討した。

【研究対象者・研究手法】

本研究では、以下5点の条件を満たす方を対象とし、性別は問わなかった。

1) 在日朝鮮人4世であり、2) 明確な意図を持って民族名を使用して生活している方で、3) 戦前・戦中の日本の植民地支配のもとで朝鮮から日本へ来た方とその子孫で韓国・朝鮮籍を有する方、もしくは、日本籍を有しつつも、自民族への一体感や帰属意識を抱きつつ日本に定住している方。ただし、本研究では北朝鮮と韓国を対象者選別において区別しない。4) 年齢については、18歳から35歳の方で、5) 両親が在日朝鮮人である方、もしくはどちらかの親のみが在日朝鮮人であるダブルの方。

計4名の対象者に、60分程度の半構造化インタビューを行った。インタビューは同意を得た上で録音し、逐語録を作成した。その後、ナラティブ分析を行った。

【分析結果・考察】

以下の3点が、検討を通して明らかとなった。

1) 現在に生きる朝鮮学校での経験

4名の対象者は、朝鮮学校に通っていた。ルーツについて歴史の授業で教わったからこそ在日朝鮮人であることを納得して受け入れることができていた。朝鮮学校での経験は、対象者のアイデンティティを構成する重要な一部となっていることが明らかになった。

2) 与えられた民族名と向き合うということ

在日朝鮮人4世にとって、与えられた民族名と向き合うことは、自身が在日朝鮮人であるという事実に向き合うこと、ひいては民族名と共に日本でどう生きていくのか考えることに繋がっていた。

3) 在日朝鮮人4世独自のアイデンティティ

朝鮮と日本のどちらにも特別なこだわりがあるとは言い切れないアイデンティティは、他の世代には見られない在日朝鮮人4世独自のアイデンティティであると考えられる。

中途肢体障害者の受障による心理的变化のプロセスの検討

－社会受容の観点を射程に入れて－

【研究目的】

本研究では、1) 人生の途上で障害者となった人はどのように障害と向き合ってきたのか、2) 中途障害者はどのように周囲の人々や社会と向き合ってきたのか、を明らかにすることで、3) 未だ障害者が生活する上で様々な不備や不便が存在する社会のあり様を、障害者の立場から考察した。

【研究対象者・研究方法】

本研究では、1) 事故または病気が原因で後天的に肢体不自由となった方、2) 受障時期が10年以上前の方、3) 社会生活において活動的な時期(10代から40代)に受障した方、4) 受障やその後の体験を心の安寧をもって語ることのできる方、5) 障害の程度や原因、性別は問わない。以上の1)～5)の全てを満たす方を対象とした。4名の対象者に60-100分程度の半構造化インタビューを行った。インタビューは対象者の同意を得た上で録音し、インタビュー内容を逐語録に起こした後、ナラティブ分析を実施した。

【分析結果・考察】

当事者は障害を実感していくと同時に「体が動かない」という健常者の頃とのギャップから、大きな喪失感を覚えていた。当事者は他の障害者との出会いや、罹患などといった転機を迎えて障害と向き合えるようになり、その中で「自身が障害当事者」としての自覚を持つようになっていく。他の障害者と関わる中で、障害者が置かれる境遇を打破していくことを覚え、障害者として生きる中での目的や生きる意味を見つけている。その後、他の障害者にとってもよりよい社会を作りたいという社会への意識を抱くようになっていく。

当事者の語りでは、周囲の人々や社会からの理解を求める姿勢よりも、当事者自身が行動することで理解を勝ち得ていく姿勢が明らかとなった。障害者が必要とする制度やバリアフリーを、障害当事者の意見を踏まえたものにすることだけでなく、社会をよりよくしていこうという希望と意思を持つ障害者の姿を理解する必要があると考えられる。

大学中退者の体験：中退後のキャリア形成に焦点を当てて

【研究目的】

本研究では、大学中退者の体験について検討した。特に中退後のキャリア形成に焦点を当て、現在就職もしくは就業中の当事者自身がどのように捉えているのかを明らかにした。

【研究対象者・研究手法】

本研究では、1) 大学中退後に就職を試み、困難を感じた経験があり、2) 現在就職または就業中で、3) 経済的に自立している方を対象とした。また、中退に至った経緯や大学生活の様子についても伺うため、4) 当時の記憶を鮮明に思い出すことのできる20~40代の方で、5) 自身の体験について安寧をもって語ることのできる方を対象とした。中退理由や性別は問わなかった。

4名の対象者に、Zoomを用いてオンライン上で1時間程度のインタビューを行った。インタビューは対象者の同意を得たうえで録音し、逐語分析はナラティブ分析を用いた。

【分析結果・考察】

対象者が中退を選択したことには、大学入学理由が深く関わっていた。対象者は、第一志望不合格による不本意入学や、親の意向に沿って進学先を決めていた。自己の適性や目標に合った大学に進学できなかったことは、大学での学びに対するモチベーションの低下や、大学生活への不適応感を引き起こす。その結果、大学に通い続ける意味を見出せなくなり、最終的には中退という決断に至ったと考えられる。

中退後のキャリア形成において、「個人が抱える困難さが中退によって顕在化し、その後のキャリア形成に影響を及ぼしている」可能性が明らかとなった。対象者の持つトラウマや不安による自信の喪失が、就職活動にも影響を与えたと考えられる。一方で、柔軟性を持って自分に適した道を選び、学歴を示す以外のやり方で自分の価値を証明することで、現在は充実したキャリアを築いている対象者もいた。

現在のキャリアは「大卒」の捉え方にも影響していた。対象者は自身の経歴に対する不安やコンプレックスから、「大卒」に強いこだわりを持っていた。一方で、充実したキャリア形成によってその不安を克服した対象者は、「大卒」であることにこだわりを持たず、中退という選択についても前向きに捉えていた。

学習支援のボランティア活動を継続する経験の検討

【研究目的】

本研究では、学習支援のボランティア活動を継続する経験に焦点を当て、ボランティアにとってどのような経験として捉えられているのかを明らかにした。1)学習支援のボランティア活動に参加をすることになった経緯、2)子どもへの学習支援をする体験、3)ボランティア仲間との関わりの体験について検討した。一連の体験を振り返った上で現在、人生に何がもたらされ、4)どのような思いで活動に取り組んでいるのかを明らかにした。

【研究対象者・研究手法】

本研究の対象者は、学習支援のボランティア団体に所属している方である。継続的に活動を行なっている学習支援のボランティア団体に所属しており、月1回以上かつ2年以上継続して参加・活動を行なっている方を対象にインタビューをした。継続している方の思いや人生に何がもたらされているのかを明らかにするため、2年以上ボランティア活動に携わっている方に限定をした。年齢は20代から50代の方を対象とした。4名を対象に、40～60分程度のインタビュー調査を実施した。インタビューは対象者の許可を得て録音をした後、逐語に起こし、ナラティブ分析を行なった。

【分析結果・考察】

対象者の語りから、もともと社会課題に関心を持っていたり、子どもと関わった経験があるという素地、新しい活動により何かを得られるかもしれないという期待感が参加行動に影響を及ぼすことが明らかになった。

学習支援の活動では、塾のように勉強を教えることだけに重きを置くのではなく、生きる力を育てることを目標にし、活動に取り組んでいる様子が窺えた。活動を継続するなかで、子どもの成長を実感し、充足感を得ていた。ボランティアは、子どもと真摯に向き合い、能力を伸ばせるよう、工夫をすることができたことで、子どもと共に自身の成長を感じ、誇りや喜びを得ていた。

ボランティア仲間との新しい人間関係は、価値観を広げることにつながり、人生にポジティブな変化をもたらしていた。対象者は、社会のために何ができるのか考え、活動に取り組むことで、自身と社会とのつながりをより豊かにしていた。

韓国ドラマに「はまる」人の語りの検討

【研究目的】

本研究では、韓国ドラマに「はまる」人の語りを検討した。「はまる」とは、趣味などに熱中・没頭することを意味し、近年では「沼にはまる」というネット用語に見られるように、肯定的な文脈で用いられるようになってきている。韓国ドラマに夢中になった人は、1) 韓国ドラマのどのような要素に魅力を感じて「はまった」のか、そして2) その体験にどのような価値を感じているのかに焦点を当てた。対象者の語りを検討することで、韓国ドラマへの没入体験が何をもたらしているのかを明らかにした。そして、3) 韓国ドラマがどのように視聴者の人生を支えているのかを考察した。

【研究対象者・研究手法】

本研究におけるインタビュー対象者は、①韓国ドラマにはまっており、韓国ドラマの役者やストーリーなどのあらゆる面を高く評価している者、②韓国ドラマ以外の日本ドラマやアニメ、他の海外ドラマをほとんど視聴しない者を対象とした。また2020年からの第4次韓流ブームを基準とし、③韓国ドラマにはまってから4年以上経過している者に限定した。先行研究では、視聴者が多い中高年層の女性を対象とした研究が多かったが、第4次韓流ブームにより視聴者の層が広がったことを踏まえ、④20歳以上の方を対象とし、⑤性別は問わずに協力者を募った。4名を対象にインタビュー調査を実施し、インタビューデータを逐語録に起こした上で、ナラティブ分析を行った。

【分析結果・考察】

役者やストーリーに魅力を感じ韓国ドラマに「はまる」ことが明らかとなった。韓国ドラマの視聴を継続する過程で、韓国ドラマの演出や脚本など作品を作り上げる要素にも注意が向くようになり、韓国ドラマの世界に魅了されていくことが分かった。

対象者4名とも、韓国ドラマに夢中になったことを肯定的に捉えていた。対象者は、異国の文化に触れる経験や物語から他者の視点を取り入れる経験をしていた。こうした経験により、対象者にとって視聴経験が価値あるものとして捉えられていた。

韓国ドラマに熱中する人々は、ドラマの視聴にとどまらずSNSで他の視聴者との交流や韓国語学習を行っており、韓国ドラマを通して人生を豊かにしていた。

ギャンブル依存回避の可能性の検討：

パチンコ・スロット経験者が体験した「危機感」に焦点を当てて

【研究目的】

本研究では、学生時代にギャンブルに興じることで何かしらの問題を経験し、ギャンブルとの付き合い方を見つめ直した者の体験を検討した。具体的には、1) パチンコやスロット経験者が体験した「危機感」の具体的な内容を明らかにし、2) 危機感がどのような状況や出来事を通じて認識されたのか、3) 危機感を抱いたことがどのように行動変容につながったのかを検証した。4) 危機感をきっかけに依存を回避できた事例を分析し、その成功要因を考察した。

【研究対象者・研究手法】

研究の対象は、ギャンブルに興じるなかで「危機感」を覚えた体験をした方である。1) 学生時代にギャンブルを開始し、ギャンブルに興じるなかで危機感を覚えた体験をし、2) ギャンブルによって引き起こされた問題を、当事者自身が問題視することのできた方で、3) ギャンブル依存まで進行しなかった方を対象とした。当時の体験をより鮮明に思い出していただくために、4) 10 年以内にギャンブル依存への危機感と向き合った体験した方を対象とし、5) 性別は問わなかった。計 2 名の対象者に対し、50~60 分程度の半構造化インタビューを行った。インタビューについては、同意を得たうえで録音して逐語録を作成し、ナラティブ分析を行った。

【分析結果・考察】

1) ギャンブルの負の影響を具体的に認識したことが危機感を生むきっかけとなっていた。自分の生活や精神状態に悪影響を及ぼす可能性を真摯に受け止めたことが、行動変容につながっていた。2) ギャンブル依存を助長する要素を意識的に遠ざけることで、自制心を強化しようとする行動が見られた。さらに、単なるギャンブルの回避にとどまらず、新しい価値観や行動習慣を築くことで、長期的な生活改善を目指していた。3) 危機感が、短期的な快楽を超えて、自らの行動を長期的な視点で見直す内発的な力として機能していた。そして、危機感自分や他者の状況を冷静に見つめ直し、変化を促す原動力となっていた。

Z世代の推し活における経済的罪悪感

【研究目的】

本研究の目的は、「推し活」において多額の金銭を費やしたことで経済的罪悪感を感じるものの、同じ行動を繰り返してしまうZ世代の心情について明らかにすることである。

「推し活」は娯楽の一つと考えられ、メディアではポジティブな面が取り上げられることが多く、罪悪感の生じる体験であると認識されづらい。本研究を通して、Z世代が「推し活」に何を求めているのかを明らかにし、罪悪感を感じる程度まで「推し活」にのめり込む理由や、「推し活」以外では得ることが難しいものは何なのかを考察する。

【研究対象者・研究方法】

本研究の対象者は、推し活に多額の金銭を費やしたことのあるK-POPアイドルのファンで、多額の金銭を費やしたことに対する経済的な罪悪感を感じたことのある方を対象とした。Z世代について研究するため、18歳から29歳の方を対象とした。金銭を費やすことを繰り返してしまう心情について研究するため、推し活を2年以上続けている方を対象とした。アイドルとの対話が可能であるアプリを用いて推し活を行っていることを条件とした。4名の対象者にインタビューを実施し、逐語録の作成後にナラティブ分析を行った。

【分析結果】

現代の推し活ではSNSを頻繁に利用している人が多く、純粹にアイドルを応援するだけではなく、自身以外のファンの存在が目に入るようになった。本研究では、自身と他者を比較して、他の人と同じでなければならないという気持ちや他の人に勝ちたいという競争心が生まれ、多額の金銭を費やすことに繋がっていることが明らかになった。

推し活に多額の金銭を費やし、対象者それぞれが問題に直面していた。費やす金額を控えたいという心情の変化は見られたものの、実際の行動に大きな変化が見られた者は4名中、2名だった。彼らは、推し活が自身の生活に支障をきたすようになったことや、推しからの見返りが感じられなくなったことで推し活への支出を控えるようになっていた。

4名の対象者は、いずれは結婚をしたり、自分自身に投資ができるようにオタクを卒業することが理想的であると考えているが、1年に1回コンサートに参加をするというような、多額の金銭が伴わない推しの応援は今後も続けていきたいと語っていた。

心理カウンセラーが経験する共感疲労の検討

【研究目的】

本研究では、クライアントとの共感的関わりが求められる心理カウンセラーの共感疲労に着目した。本研究では、1) 心理カウンセラーが感じる共感疲労の実態を明らかにするとともに、2) 心理カウンセラーが、共感疲労にどのように対処しているのかを明らかにした。インタビュー調査による聞き取りを通して現状を把握、検討し、最終的には 3) 心理カウンセラーのバーンアウトをどのように予防することができるのかについて考察した。

【研究対象者・研究手法】

本研究では、以下の 6 つの条件を全て満たす方を対象とした。1) 心理カウンセラーの方で、共感疲労の症状を感じたことがありながらも、2) 今も心理カウンセラーとして仕事を続けている方。3) 年齢・性別は問わない。4) 過去に体験された共感疲労の症状の重さは問わない。5) 共感疲労の経験から 2 年以上経過しており、心の安寧を持って当時の体験を語ることのできる方。6) 守秘義務の範囲内で共感疲労の体験を語ることのできる方を対象とした。4 名の対象者に 45～100 分程度の半構造化インタビューを実施した。インタビューは対象者の了承を得た上で録音し、逐語分析はナラティブ分析を用いた。

【分析結果】

1) 共感疲労とは、共感的理解によってクライアントの苦しみをありのまま受け止める中で、心理カウンセラー自身が病に陥らないための防衛本能であると考えられた。4 名の対象者は、共感疲労を無くすことはできないとして受け止めていた。しかし、共感疲労を深めると、心身に支障を来すため、2) クライアントから適切な心理的距離を取ったり、同業者との語りの場を設けたりすることで共感疲労と向き合いながら、クライアントの回復をやりがいとして仕事を続けていた。これらの対処行動は Figley(1997)が提唱した、クライアントから心理的距離を取る「離脱」と相手の苦しみを和らげたり、解放したりすることで得られる満足感である「達成感」と一致した。3) クライアントの回復を早めるためには、心理的治療の保険適用化によって、治療の壁となるコストの削減が考えられた。また、クライアントの内面に入り込みすぎることを防ぐために客観的意見をもらう場や、仕事の悩みを打ち明けられる語りの場として心理カウンセラーのコミュニティの形成が、バーンアウトを防ぐために有効であると推察された。

場面緘黙という体験

—当事者の寛解体験に焦点を当てて—

【研究目的】

本研究では、過去に場面緘黙症を経験し、現在は寛解状態に近い者（以下、場面緘黙経験者）の体験を検討した。特に、周囲の人との関わりが見られる社会的場面（学校や職場）で、1）場面緘黙経験者が寛解に至るまでにどのような体験を重ね、2）寛解の前後で、どのような気持ちの変化が見られたのかを明らかにした。その上で、3）当事者目線から、場面緘黙症とはどのような体験なのかを考察した。

【研究対象者・研究手法】

本研究では、場面緘黙経験者を対象にインタビュー調査を行った。場面緘黙経験者の性別や、緘黙症の発症時期、継続期間については、特に定めなかった。インタビューにて（学校生活などの）社会場面でのお話を伺う事や、寛解していくまでの経過を想定し、18歳以上の方とした。現在、体験について心の安定を保ちながら語ることのできる状態にあることを条件とした。計4名の対象者に対し、60分程度で半構造化インタビューを行った。インタビュー内容は同意を頂いた上で録音し、逐語録を作成後、ナラティブ分析を行った。

【分析結果・考察】

場面緘黙症は、1人ひとり異なる臨床像を持つ。家庭など特定の状況では、発話が可能なため、症状の認知がされにくい。加えて、当事者が声を上げて助けを求めることが困難であるため、彼らの苦悩は表に出にくい。症状が寛解する前に、周囲から受けたネガティブな体験（発話を期待・強要される状況）は、3つの否定的な感情を当事者に引き起こしていた。1つ目は自責、2つ目は自身の症状に対する恥ずかしさ、3つ目は周りの反応への不安や恐怖心である。これらは人との関わりを回避しようとする行動へと繋がっていた。一方で、寛解後は、全ての対象者が人と関わることにに対して肯定的な感情を抱いていた。1人ひとり異なった寛解体験を通して、自身を受け入れてくれる人や環境と出会い、「人と関わることの楽しさ」を見出していた。

場面緘黙症における“寛解”とは、ただ発話や表情を出す事ができるようになった状態ではなく、ありのままの自分を受け入れ、人との関わりを負担として感じるのではなく、楽しいと感じられる状態に至ることであると考えられる。

「性別違和」の体験の検討

【問題と研究目的】

本研究では、性別違和（旧性同一性障害）を経験する者が性別違和とどのように向き合っているのかについて検討した。性別違和を経験する者は、違和感を覚えながらも求められる性役割を果たそうとしたり、時と場合によっては自分の見せ方を変えたりする中で、ありのままの自分らしくいられないことに葛藤を感じる。本研究では、性別違和を感じてきた当事者のひととおりではない性別違和とのつきあいかたを検討した。

【データ収集・分析の方法】

本研究におけるデータ収集は、インタビュー調査によって行った。インタビュー対象者は、性別違和の経験を持つ、20代～30代の方とした。対象者の生物学的性や自認する性、性的指向については問わないこととした。自認する性と身体的性の不一致について一定程度心理的に解消されている方であること、「性別違和」を根拠とする他者の処遇によって日常生活の継続が困難となるような経験をされていないこと、一連の体験を語ることに大きな精神的負担を生じることのない方であること、という条件を設定した。3名の対象者に、60～90分程度の半構造化インタビューを行った。インタビューは対象者の許可を得て録音し、逐語録を作成した後、ナラティブ分析を行った。

【分析結果と考察】

本研究では、性別違和を経験する者が必ずしも生物学的性と反対の性別を自認していたり、反対の性として扱われることを望んでいるとは限らないことが明らかとなった。対象者の自認する性は流動的で、かつ複雑に多要素が混ざりあっており、現在の男女二元論に基づいた二極的な分類にはあてはめられない様子が見受けられた。

いずれの対象者も、自身の生物学的性に合わせて、他者から家父長制や男尊女卑の価値観に基づいた振る舞いを求められることに対して強い嫌悪感を抱いていた。生物学的性と自認する性との間に不一致を感じている対象者にとって、他者から自身の生物学的性に応じた社会的性役割を求められることは大きな苦痛をもたらすことが明らかとなった。

対象者は、自身の性別違和のありさまについて正しく理解してくれる他者との親密な関わりの中で、自身の性役割や振る舞い方について交渉できる関係性を築いていた。社会的性役割を押し付けられない関わりを得たことが、対象者にとって自分らしく生きる上で大きな支えとなっていることが明らかになった。